

巻頭言

理事長就任ご挨拶

独立行政法人大学入試センター 吉本高志

この度“大学入試フォーラム”第30巻の発刊を迎えることになりました。1983年、本誌の創刊号の冒頭に、当時の小坂淳夫所長が以下のように述べております。

「大学入試センターが設置され6年、かねて建設中の新庁舎が竣工式を迎えるにあたり、何らかの記念を企画し明日への果たすべき役割をより充実させ、その発展を期したいと考えた。関係者一同熟慮の結果、まず、大学入試センター設置の原点に立ち帰り、6年の歩みを回顧すると共に、過去5回の共通一次試験の総括及び研究状況の紹介を主要テーマとする“大学入試フォーラム”第一号を発刊することとした。本誌は、引き続き季刊としての発刊をつづけ、広くセンターの業務、研究成果の紹介を中心として大学入試の改善に役立てたいと考えるに至った。なお、年次報告書、広報誌に屋上屋を重ねることをさけ、一般広報誌と研究紀要との中間的な情報誌とした」。

そして、当初の季刊の企画は、1993年より年1回になりましたが、この創

刊時の方針は受け継がれ今日に至っております。時の経過の中で、編集委員会をはじめ本誌の発行に関わっていただきました多くの方々に深く敬意を表したいと思います。

さて、私は平成19年4月に大学入試センター（以下センター）3代目の理事長に就任いたしました。東北大学医学部の出身で、専門は脳神経外科学です。東北大学教授、医学部附属病院長、医学研究科長、医学部長を経まして第19代東北大学総長を務めさせていただきました。明治の帝国大学令、終戦に伴う新学制に次ぐ大きな大学改革として捉えられております国立大学法人の前後の移行時期に4年間、大学の責任者として、教育、研究、そして、それを基にした社会貢献にそれなりに携わって参りました。なお、理事長としては3代目ですが、センター設立時の責任者の職責としての所長といたしましては9代目であります。初代の所長は、第13代東北大学総長より就任された故加藤陸奥雄先生であり、私の大先輩で今から30年以前のことであ

ります。

本年4月からセンター構成員は、新たに役員等に就任した者など多くの新任者を迎えております。監事の水間英光氏、試験・研究統括官の田栗正章氏、適性試験企画調整官の小牧研一郎氏、総務企画部長の松ヶ迫和峰氏、事業部長の山口良文氏、研究開発部長の宮埜壽夫氏等々であります。理事として豊富な経験のある月岡英人氏と共に、新任の方々と力を合わせ、これまで多くの先人の大変なご努力により築かれました歴史と伝統を守り、センター法に明記されております目的「大学に入学を志願する者に対し大学が共同して実施することとする試験に関する業務等を行なうことにより、大学入学者の選抜の改善を図り、もって大学及び高等学校における教育の振興に資する」をその中心に置き、確実な歩みを続けてまいりたいと思っております。

さて、現在の社会の動きは大変に急なものがあります。センターの沿革をとりあげましても、昭和52年5月の開設以来、これまでの30年間の中で、54年1月、第1回共通第一次学力試験の実施、平成2年1月、第1回大学入試センター試験の実施、13年4月、センターの独立行政法人化、平成15年8月、第1回法科大学院適性試験の実施、18年1月、センター試験に英語リスニングテストを導入、同4月職員の非公

務員化などであります。

一方、昨今の大学入試に関しまして、入学者選抜制度改革の位置づけより多くの新たな視点が提起されております。幾つかを列举しますと、大学全入時代の到来、センター試験の国公立大学の参加、推薦入学、AO入試などの選抜方式の多様化及び評価尺度の多元化、分離分割方式の弾力化、法人化等による入学者ポリシーの変化、学力試験方法を含んだ高校、大学連携の重要性などであります。

大学入学試験という、極めて公共的性格のある業務を確実に実行すること、に全力を尽くすことは論を待ちませんが、同時に大学入試を取り巻く激動の現状からも、センターは逃れることはできないとも思っております。センター法による組織のあり方を考えますと、近未来、さらにもっと長期的な観点から、これらの諸問題にむしろ正面から取り組むことが要求されていると自覚いたしております。

センターの所管省庁であります文部科学省のご指導を受けつつ、センターの役割についても更なる展開をする時期に来ているのではないかと真摯に思っております。

先輩諸兄におかれましては、今後の変わらぬご指導、ご支援をよろしくお願い申し上げ、就任のご挨拶といたします。